

傍目で異常に恋してゐる（ヒロインの自我がすごい版）

鷹司秀の家が爆発した。

奴の目を盗んで、私がキツチンに細工をしたのだ。

監禁当初は決まつた部屋の出入りしか許されなかつた——しかも、鷹司秀の付き添いが絶対条件で——私がキツチンに入れるようになるまで、それはそれは大変な日々があつた。

監禁強姦魔の油断を誘うためといえど、媚びへつらう日々は本当に辛かつた。主に下半身が。

そして今、爆発した家を二人で茫然と眺めている。

私の目論見としては、いつも通りにキツチンに入つた鷹司秀」と爆発させる予定だつた。それがどういうわけか、二人で出かけている隙に静電気か何かが発生してしまつたらしい。

お出かけ先で散々変態プレイを楽しまれ、疲労困憊になり、車から家へ運び入れるため強姦魔に横抱きされた状態で、轟音ののちに燃え盛る家屋を見ている。ちらりと見上げて鷹司秀の表情を窺うと、普通に驚いている様子だった。

この男、こんな顔もするのか。

郊外にある、小さな森の中の邸宅だ。

火事で森が焼けてしまうとまずいからか、鷹司秀が通報をする前に消防車が来た。予定とは違つたが、千載一遇のチャンスだ。

助けを求めようと大きく息を吸つた瞬間、信じられない素早さで車に押し込められた。いつもの後部座席で、いつものように逃走防止の器具で固定されてしまう。

内心で、最悪チャイルドシートと呼んでいる。手足はしっかりと手錠で固定されだし、ブランケットをかけられ隠蔽工作もばつちりだ。

消防士たちはまずは火に夢中らしく、これでは注意を引く前に鷹司秀に完封されてしまう。

私を最悪チャイルドシートに固定した鷹司秀が、覆いかぶさつたままにつこりと笑つた。

「君だね？」

バレた。

素直に認めるのと、後の調査で発覚するのとどつちが酷くされるだろうか。迷つて無言になつてゐる間に、鷹司秀は車の中に常備してゐる睡眠薬を私の口にねじ込んだ。錠剤ごと喉の奥まで指が突つ込まれ、呻き声が出る。

しつかり飲み込んだのを確認するために、口の中をあちこち探られたあとやつと指が引き抜かれる。

「良い子にしてるんだよ」

額に唇の感触がして、鷹司秀が離れていく。職質で睡眠薬見つかれた。

意識が薄れていく中で、それだけを強く願つた。

◆

次に気がついた時、ホテルの一室にいた。
具体的にどこのホテルかはさっぱりわからないが、内装を見て一発で高級なところだと理解した。
人目につかず運び込むことは不可能だつたはずだけれど、どうやつて誤魔化したのだろう。

金さえあれば、誘拐した人間と一緒に高級ホテルに泊まる、ことも可能なのか。
世の中の理不尽に、改めて怒りが湧く。

起き上がって動こうとしたが、ベッドで寝ていた私の手首には当たり前のように手錠がかかっている。
そして左の足首にかかつた足枷が、延長した鎖からベッドの脚に接続されていた。

詰んだ。
もうベッド抱えて脱出するしか切り抜け方が思いつかない。

しかもこのベッド、クイーンサイズだ。
そしてさつきから扉の向こうから微かに響いていたシャワーの音が、止んだ。

石鹼の香りとともに、バスローブを着た鷹司秀が寝室に入つてくる。

「目が覚めたんだね、気分はどう？」

こいつにこう聞かれた時に、最悪以外だつたことはない。

鷹司秀は無視さえしなければ滅多に怒らないが、さすがに家を爆破されたら怒るだろう。

まだ髪も湿つている状態で、鷹司秀が私の隣に座る。
クイーンサイズのベッドが不穩に軋んだ。

大きな手が、私の頭を撫でる。

「少しおかしいとは思つてたんだ。最近は随分と素直だつたし、もしかして心情の変化があつたのかと思つて喜んでたんだけど……君には振り回されてばっかりだ」

鷹司秀が、苦笑する。

その表情に怒気は含まれていないが、油断はできない。
髪を撫でていた手が降りてきて、頬に触れる。
風呂上りの肌は温かく、それから良い匂いがした。

「火元はキツチンだつたそうだよ。そういうえばこの間から、一緒に料理するようになつたよね。君が作つたものを食べられるのは、すごく嬉しかつたんだけどな。——もし家にいたら、僕ら一人とも死んじやつてたんだよ、わかつてる？」

そうられた。

鷹司秀が、声を低くして涙んでくる。

いつもならそれだけで全身が強張つて何も言えなくなるけど、今回ばかりは言葉がすらすらと出た。

家が爆発すれば、自分も死ぬかもしれないなんて分かつてゐる。
それでも、キツチンを使うのは大抵鷹司秀だ。

爆発の威力がどのくらいかは分からないまつたことだけ、少なくとも鷹司が死ぬならそれでよかつた。

勢い余つて、私が死ぬことになつてしまつても。

怒鳴り声まじりに、だいたいそんなことを言つた気がする。

だだつ広い寝室の中、私が肩で息をする音だけが響く。

ずっと隠していた殺意を告白したあと、鷹司秀は喋らなくなつてしまつた。

沈黙が続くことに耐えられなくなり、視線を上げる。

無表情か、怒りか。

そのどちらかだと予想していたのに、鷹司秀は涙目だつた。

悲しんでいるのとは違う、どちらかといふとこれは興奮している。

「……僕と一緒に死んでもよかつたなんて。そんなに、僕のことを想つて……」

違うなあ。

“あなたと一緒に死にたい♥”的な話では全くなかつたのだが、鷹司秀はそう受け取つたらしい。

分厚い体が、いきなり抱きついてくる。

バスローブのはだけたところから、胸筋に顔が埋まつた。

震えている。感動している。完全に誤解で。

「大丈夫だよ、もし君に何かあつたら僕はちゃんと後を追うから。だから安心して」

何も安心できない。

絶対嫌なので、やつぱりどうにかして心中じやなくて鷹司秀だけ仕留めようと思う。

そして一秒でも長く、叶うなら五十年ほど長く元気に生き延びるのだ。

私は心にそう誓いながら、機嫌を損ねないよう無言を貫いた。

あとお仕置きはなかつたけど、鷹司秀が興奮したので結局めちゃくちや抱かれた。畜生。